

景観フォーラム

巻頭言

2021年 謹賀新年 あけましておめでとうございます。百年に一度の大災害に見舞われた昨年でした。世界はグローバル化の名の下に瞬時に情報を共有できる時代となったと同時に、感染症というものもあつという間に世界を席巻するようになりました。世界は緊急事態を宣言して人間の動きを停止することによって、感染症の広がりを防御しようと試みましたが、一年が経過した現在、未だその広がりは停止していません。昨年から一年延期した東京オリンピックがこの夏に予定されておりますが、本当に実施できるのでしょうか。

さて、この20世紀末から始まったグローバル化というものは市民革命としての自由・平等・友愛というコンセプトとどういう関係があるのでしょうか。グローバル化という現象は、人類がアフリカの地から右回りに南アメリカの最南端に達した動きを始まりとすれば、コロンブスのアメリカ新大陸発見を第二とし、そして、コンピューターの知識革命を第三と考えていいかと思えます。これらのグローバル化の明確な特徴は人間中心主義がその核にあるということではないでしょうか。進化・進歩という概念は人類だけのもののために存在するという都合の良いものだと思えてなりません。歴史とは人類の歴史を語るだけでなく自然の歴史を語るを得なくなったのがこの21世紀ではないでしょうか。即ち、自由、平等、友愛に環境を念頭に置いた“共生”という概念を追加しなければならないでしょう。

想像するに、恐竜時代というのが200万年前から100万年前という100万年の栄華を誇って死滅しましたが、人類がホモサピエンスとして出現したのは20万年前であり、恐竜時代の5分の1しか生き延びてはおりません。まだまだ恐竜の方が人類よりこの地球上では大先輩と言えるのではないのでしょうか。

人類は人類独自の病を内包しております。その名は“戦争”という名称の病気です。丁度100年前、第一次世界大戦はスペイン風邪という大感染症によって戦争行為が不可能となりその終結を早めたと言われております。即ち、人類の戦争を終結する最も確かな手段は感染症であったということは何たる皮肉なことでしょうか。世界を襲った百年に一度の感染症を経験した私達は、“景観”を考えるときにはこの人類的観点から考えるというのも、また新しい入口かもしれません。本年もよろしくお願い申し上げます。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム 2020年度年間スケジュール>

*2020年度とは2020年4月1日⇒2021年3月31日のことです。

2020年

- 4月24日(金) 第1回理事会・総会 於 JICA 研究所⇒中止
- 5月21日(木) **第1回景観研究会** (東京の景観) 於 JICA 研究所⇒中止
- 6月28日(日) **第1回景観まちあるき** (東京都内:?) ⇒中止
- 7月21日(火) 第1回理事会・総会 於 JICA 研究所 **第2回景観研究会** (東京の景観まちづくり) 於 JICA 研究所
- 8月 夏休み(景観研究自由参加) or 一泊二日で遠方の町並み見学会など?
- 9月25日(金) **第3回景観研究会** (東京の景観) 於 JICA 研究所⇒中止
- 10月18日(日) **第2回景観まちあるき** (東京都駒場)
- 11月20日(金) 第2回理事会・**第4回景観研究会** 於 JICA 研究所
- 12月17日(木) 忘年会(？の居酒屋) ⇒中止
- 12月26日(土) リモート忘年会(参加者5名:18:30~20:00)

2021年

- 1月11日(月) リモート新年会(17:30~19:00)
- 1月21日(木) **第3回景観まちあるき** (横浜市元町周辺)
- 2月18日(木) **第5回景観研究会**: 於 JICA 研究所
- 3月28日(日) **第4回景観まちあるき** (未定)

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

ビンテージ・オーディオ

石見茂夫

ある朝突然、オーディオのアンプの電源が入っていてライトが点灯しているのに気がついた。昨日スイッチを消し忘れたかと思っただけで、昨日はオーディオを使っていない事に気がついた。なんで電源が入っているんだろう？不思議に思ったが間違いなく電源が入っていてランプが点いている。取りあえず電源を切ろうとスイッチをOFFにしようとしたが、まったく反応せず電源が切れない。何回やっても電源が切れない、こんな事は今までに一度もなかったので焦って何回操作をしても一向に電源が切れない。朝で忙しかったので仕方が無いので電源コードをコンセントから抜いて電源を切った。こんな事は初めてだ。いろいろな電気器具を使っても電源が切れなくなったのは、昔使っていた古いパソコン以来の出来事だ。

あらためて、このアンプの事を考えたら既にもう30年以上も使っている。故障してもおかしくないが、故障のしかたが気持ち悪い。数日間いろいろ試しながら使ってみても電源スイッチは直る兆しはまったく無いが、アンプの機能は正常に音も出てボリューム等のコントロールも普通にできるが電源が切れない。

既に常勤の仕事は無く非常勤での外出程度に成っていたが、新型コロナの影響で今まで以上に外出の機会が少なくなり自宅でオーディオを聴く機会が増えつつある時だったので不便になった。今まで何気に普通に使えたものが使えなくなると本当に不便を感じる。30年以上前の製品を修理してくれるところは少ない、特にこのアンプはアメリカのメーカーのものだったのでなおさらだ。輸入元に聞いても既に部品が無くメーカー修理は受け付けていないと冷たい回答だった。それでも修理をしてくれるところをネットで探し始めるといくつか候補の工房が見つかった。



(今回故障して修理した、アメリカのマッキントッシュ社製のコントロール・プリアンプC34V)

このアンプのことを考えていて、35年程前にステレオサウンドと言う専門雑誌から出版されたサウンドスタイル特集号の取材を受けて記事になった事を思い出し本箱からその本を見つけ出した。あらためて記事を読んでもみると、「これから、欲しいも」と言う項目があり欲しいオーディオ機器が列記してあった。その時に欲しかった機種はみんな既にモデルチェンジされていて、購入出来た時には後継機種に成っていた。アメリカのマッキントッシュと言うメーカーの製品で少量が日本に輸入されていた。オーディオの展示会などで何度も視聴して長い間このメーカーの製品が欲しくてたまらなかった。その製品は国内メーカーのものとは一桁違いの価格だったので何年間も熟考した結果購入に踏み切った。そんな思い入れのあるアンプが壊れてしまったので、何としてでも直してまた普通に使いたいと心に決めた。



職業は設計技師、来年はXRT20を購入予定「女房とはだいぶもめると思っていますね」

三見さんの本等での専攻は異機異音研究。設計技師。だから、設計技師といっても、石見さんが設計するのは、ビルや高層ビルは、公園や、河川敷、温泉、ビルの外観など、今まで手がけたものに、ラフォーレ銀座や高級ツインタワービルの外観、現在、進行中のものには近代建築物の温泉がある。

「ぼくはアンプの影響をうけてあんなです。ぼくは音楽はたがいますが、アンプはアンプやスピーカーを目でつくっちゃうまで、今は電気会社に勤めてますが、11年まえ、石見さんは結婚をして、独身の音楽で同棲と同居することになった。

そのとき、お見さんがお説いにくれたのが、アンプとスピーカー。それが、すつと、その状態でもいってました。で、去年、カセットデッキを買いかえたら、こうしたらもうと音がよくなるだろうという思いが強くなくて、半年間で、アンプとスピーカー、プレーヤーも、まえますから、いつかは買いかえようという気持ちもありましたからね。」

「ちょうど、子どもももう産まなくていい、音楽を大きくていざいざに全部もてきた結構だった。」

「それまでは、なかなか強ですよ、仕事の本を揉んだり、子どももいなくて、ちよちよよろしかったですからね。」

「去年、約半年間でオーディオに費したのは約百万くらい。女房は、自分の小使いから少しづつ貯えたものか約10万。あとはボーナスでまかされた。」

「女房がはると女房はどにかいいますけど、ぼくのお金ですから、生活をおひやかすわけではありませんが、最近には自分もあいてますから、軽い音楽が多いようですよ。クラシックなピアノ曲から、石見さんはビートルズやビートルズ、かつてはビートルズやソウルを聞いていたが、今はジャズかクラシックだ。」

「演奏するのは聴きたがりますが、ワイスキーも飲みながらジャズをまぐ、休日には買い物にまわったりして、午後3時からからクラシックをまぐ。」

「学校の関係で、ぼくは高校のころから、音楽をやっています。音楽好きなながら、

「結婚30年の方でいらいなんですけど、去年は借金して買ったつもりです。女房とはだいぶもめると思っていますね。」

「地方出張が半日とか8日もある石見さん。今、このお正月のついでにマッキントッシュを買い、1年後自分のものにできるまで、思いをはせているかもしれない。」

「来年、信州のペンションに家族づれで行くんですが、そのオーディオがすごい音ですよ。あ、さうい、近々そろえる予定のものって書いてたでしょ。あれです。確かに、先ほど石見さんは静かな表情で、

- カートリッジ ● ハイフォニック MC-A3
 - アンボン DL183
 - ヘッドアンプまたはトランス ● フェスクリー SF1055
 - ターンテーブルまたはプレーヤー ● システム ● トーレンス TD141
 - カセットデッキ ● センスイ DW9
 - プリメインアンプ ● センスイ AN-LD 807GE
 - チューナー ● ヤマハ T963
 - スピーカー ● システム ● DL4312
- これから、石見さんのマッキントッシュ MC2256, D26, XRT20

(当時、掲載されたステレオサウンド社のサウンドスタイルの記事)

ネットで調べた修理工房は大宮に見つかった。故障の状況を詳細に連絡すると数日後にメールで回答があった。おそらく修理が可能だが実物の状況を診断しないと確実な事は返答できないと言う事であった。診断は宅配でも受け付けてくれるとのことであったが、どのような人が修理してくれるのか何かと心配なので行って修理工房の状況も確認する事にした。

持参当日は病気になった子供を病院に連れて行く心境で、嚴重に梱包したアンプを車に乗せて大宮に向かった。工房では私と同じような年齢のベテラン技術者が数人待っていてくれて、早速アンプの状況診断をしてくれた。その結果、修理は可能だが既にメーカー純正の部品が無いので代替の同等品を使いたい旨の確認があり、現時点での修理費用は基本料金の他に概ねの費用の提示だけで工賃は作業時間に比例して変動する事と部品は実費を支払う事に同意して修理依頼することにした。

修理には1か月以上の時間が必要との事であった。

その工房には総勢5～6人位の技術者が居るようで、ベテランに混じって若い人も2人程居るようだった。ベテランの方達はメーカーに勤務後リタイアした方のように、見るからに技術者の雰囲気を持っている人達であり安心して修理を任せらそうであった。

修理途中に数回メールでの状況報告と確認事項の問い合わせがあり、依頼してから1か月半ぐらい経った時に修理報告書と修理費用の明細書がメールで送られて来た。詳細な報告書には修理は完全に終了し部品は一つのコンデンサーの交換だけで済んだとのことであった。

30年の使用年月で機器全体の接点等の劣化があったがクリーニングや接点の再接着などで問題は解決したようであった。長期間まったくメンテナンス無しで使用してきたが機器本体そのものの劣化が少なかったので一安心出来た。今回は修理費用が5桁に乗ってしまったが、たいへん満足できるものであったと同時に交換部品のコンデンサーの代金がたったの100円だった事に驚いた。

技術料の概ね、1/1000であった。

今回の故障の一番重要な症状であった、電源が切れない状況は電源部の接点部分が劣化してスイッチを切っても通電状態になっていた様子であった。

よく考えるとたいへん危険な状況であり、ある意味では漏電状態になっていたようであった。最近の電気機器でも取扱説明書の最初に機器に不良がある場合は電源コード抜くことが記載されていたのを思い出した。



(現在使用中のオーディオ機器)

この度のオーディオ修理で良い工房が車で1時間位の近い場所にあり良かったと思う。
今使っているオーディオ機器はすべてが同年代の製品なので他の機器も急に故障することが想定され頼もしい工房が見つかりまだまだ安心して使い通せそうで一安心している。
今回の故障はプリアンプであったが、まだメインアンプ、スピーカー、レコードプレーヤー、プレーヤー用変圧トランス等が、いつ故障してもおかしくない様な年齢になっている。
CDプレーヤーとチューナーは故障したら交換するのが良いと思っていて、カセットデッキは既に使用することが無いので必要が無くなる。



(マッキントッシュXR26スピーカーから出る音を聴いている)

コロナ禍で在宅時間が長くなり自宅で音楽を聴く時間が取れるようになり、永年集めていたジャズやクラシックを聴きたいと思っている。特にジャズは1950年代から60年代にかけて録音されたブルーノートのレーベルのCD版をほぼすべて揃えてある。レコードのものも1980年代に東芝レコードが作成したブルーノート・レーベルの重量級の復刻版が100枚以上は有ると思う。

元々このオーディオ機器はCDよりもレコードを聴く目的で揃えたものなので、全体的に柔らかい穏やかな耳触りが良い音色が出ていると思っている。

ちょうどその頃にマスターレコードからデジタル化されたCDが開発されて、たしかソニーとフィリップスがCDの特許を取り再生用のCDプレーヤーの機器を発売したばかりの頃だった。

数年後にそのCDプレーヤーがオーディオ・メーカー各社から次々と発売され始めた時代であり急激にオーディオ機器のデジタル化が始まろうとしていたのを思い出す。

今ではデジタル・オーディオが一般的なりCDすら古臭いものに成りつつあり、通信で好きな音楽を購入するのが一般的な時代になってしまった。

こんな歴史を持つ古臭いレコードと格闘しながら至福の時間を持てるように、一日も早く新型コロナが収束してくれるのを願うばかりである。

2020年（令和2年）12月

預言者

豊村泰彦



このところ毎日、新型コロナウイルスの感染者拡大のニュースがテレビで報じられているが、その度に不快な気分になっている。不快なのはウイルス感染そのものよりも常に後手後手の対策に終始する政府や東京都である。最近テレビのニュースで顔を見て気分の悪くなるベストワンは菅総理、ベストツーは小池都知事だ。

行政のトップやその周辺に少しでも先が読める人がいないものかと思議に思う。これだけ科学が発達しても災害が起こることを予測して事前に手を打つのは難しいようだ。しかしそれでは、今回のような人知を超えたパンデミックの前では常に後手を引くだけで、社会への打撃は大きくなる一方である。

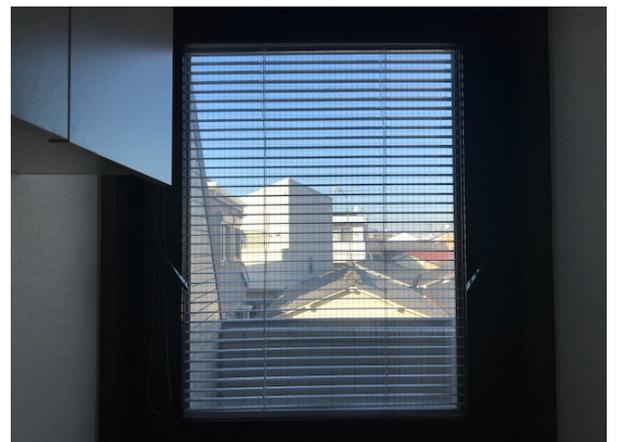
文明社会以前はリーダーとなる人やその近くには、必ず預言者がいた。その時代の危機は自然災害であれ、病気で、対処方法は同じで、呪術（まじない）によってより良い方向に導いていた。それが現代では、祈祷師や呪い師が国や民族を守ったとか預言者が災害を予測して多くの人を助けたという話は聞かない。現代は預言者不要の社会なのだろうか。

否、科学知識やデータだけでは解決できない問題を予知能力を融合させながら預言し、改善方法を唱える人間はきわめて少数ながらいると考える。

例えば、今回の新型コロナウイルスを5年前に米マイクロソフト創業者で慈善活動家のビル・ゲイツが予測しているのだ。かれはアメリカ全土の封鎖を呼びかけるなど現在も積極的に政策提言をしている。

ビル・ゲイツなどは、パソコンを全世界に普及させたパイオニアで、世界ナンバーワンの金持ちになった人でもあるので、やはり普通とは違う超越的な力を持っていると考えることができる。したがって、彼が未来を予測できる特別な能力を持っていてもおかしくないと思像する。

こういう人こそ政府の枢軸に据えて、意見を聞いたらよいのではと思うが、現代では預言者的な人物は政治の表舞台には出てこない。ただ、ビル・ゲイツについては、連邦政府に陰から助言を与えたり、経済界の重鎮が参加する会議などで間接的に提言しているようである。



ビル・ゲイツのような予知能力を持った人が世界にはどのくらいいるだろうか？本当に予知能力があるかどうかは疑わしいが、預言者と呼ばれる人は、世間にはかなりいると思う。

では預言者はどこにいるのか。その活躍の場として挙げられるのが、宗教である。宗教の世界では集団化し、組織化されると、頂点に立つものは教祖として崇拜される。教祖は神の使いであり、神からの啓示を信者に伝えることが神命である。したがって教祖及びその中枢にいる人は預言者でもあるのだ。ユダヤ教もイスラム教も構造は基本は同じである。頂点に立つ教祖が真の預言者かどうかは外部からは判断はできないが、信者にとっては教祖は預言者でもあるのだ。

宗教上の預言は昔も今も将来起こるべき物事について伝えられたものが信じることで成立する。しかし、一般的な予言は、伝えられたものが信じるか信じないかは関係なく、預言した通りにならなければ、預言は成立せず、預言者とは認められない。現代では、大地震などの災害を予言するもほとんど当たることはなく、預言者として多くの人が認めるような者は見当たらない。それでも、預言者を待望する人は科学万能の時代にあっても、否科学万能の時代だからこそ増え続けるのである。

ビル・ゲイツも預言者リストに加わる貴重な存在かもしれないが、ここ数年でとんでもない予言者が出現する可能性が出てきた。AI（人工知能）である。AIはコンピュータの進化によってパワーアップし地球上にあるあらゆるビッグデータを集積し、それを正確に選択、応用して問題解決に使える、未来の予知も人間が取るべき行動も、預言できるようになる。その能力は万能であり、地球上のすべての人間にタグづけをし、行動を把握する。そして、個人一人ひとりに何をすべきか啓示を与えることができる。そうなると人がコンピュータに支配されるのと同じになるかもしれないが、それは悪いことではないかもしれない。今でもすでに人は大量なデータを処理するコンピュータの助けを借りて生活しているのであって、そんなに違和感のあることではないだろう。今でも天気予報士がデータに基づき「午後に雨が降る確率は30%です」と予報が出れば、それを聞いた人は傘を持って出かけるではないか。それとそんなに変わらないのである。



駒場～代々木界限まちある記

野田路人

今年はコロナ禍により年度初めから会の活動も自粛を余儀なくされ、メンバーでの会合やまちあるきもほとんど出来ず、残念な半年を過ごしました。

収束の兆しが見えず、自粛生活にも多少ストレスが溜まり始めたこともあり、活動再開の手始めとして三密を避け、屋外で近場のまちあるきをすることし、人混みが少なそうな場所で、交通の便が良く参加メンバーが参集、散会し易い場所で候補を絞り、「駒場～代々木界限のまちあるき」を10月18日に実施しました。

井の頭線や小田急線には乗車していても、殆ど通過のみで、今までゆっくり立ち寄ったことがあまり無いまちを歩くと新しい発見があると期待して集合場所の駒場東大前(井の頭線)を11時にスタート。

まず、立ち寄ったのは、駅前の「駒場野公園」・・・ここは明治時代の駒場農学校(旧東京教育大学農学部)の跡地を整備した公園。武蔵野の面影を残す木々の中に教鞭をとったドイツ人教師ケンネルにちなみ「ケンネル田んぼ」と呼ばれる水田が今でも残されています。



公園を抜け、踏切を渡り駒場通りに入ると左右は大きな住宅が並ぶ閑静な住宅街、進むと町並みとは異なる雰囲気建物が見えてきました。これは「民藝」とう新しい美の普及を目的に思想家の柳宗悦によって企画創設された「日本民藝館」で柳の審美眼で集められた陶磁器や漆木工、絵画、金工品など約1万7000点が収蔵されているとの事ですが、今回は外部からの見学のみとしました。通り沿いの建物の屋根を見ると屋根瓦はなんと凝灰岩(大谷石)、水に侵食され易いと言われている凝灰岩を使用している屋根を見るのは初めてで、大変驚きました。軒先で修復した新しい部分があるので、時々手を入れて建物を維持しているのではと思います。



続いて訪れた「目黒区立駒場公園」は加賀百万石の当主だった前田利為侯爵の駒場邸跡、公園入口の門構えから立派で、園内のうっそうとした木々を抜けると、昭和4年(1929年)築の洋館と昭和5年築の和館があり、洋館、和館とも当時の建築の粋を集め、見ごたえは十分ですが見学は無料。目黒区が維持管理をしており国の重要文化財に指定されています。洋館内には前田侯爵とその家族や敷地内建物各所の説明資料の展示パネルなどもあり、ゆっくり見だすと時間はかなり必要で、また機会があれば見学に訪れたいと思います。園内の洋館と和館の間に車のガレージを復元した公衆トイレがあり、ガラスに当時の車の写真をはめ込みその裏側に綺麗なトイレが作られ、中々面白いアイデアだと感心しました。



公園全体案内板



正門：門柱、門扉



洋館



和館



前田育徳会の建物



復元車庫の公衆トイレ

「駒場公園」から、代々木上原駅に向かうと区界を越え渋谷区になりました。割と細い道幅の両側には敷地を分割し、狭い敷地に建つ3階建ての建売住宅は見かけず、立派な塀や生垣に囲まれた住宅や低層の集合住宅が続き、緩やかな坂道を下ったり登ったり、T字路や不正確な十字路など変化に富み、緑の多い閑静な高級感を感じる町並みとなっていました。



代々木上原駅近くの細い下り坂を下り、高架駅下の店舗街を横目に見ながら抜けると賑やかな商店街に続き、かなりの人出となっていました。商店街のお店でチョット遅めのランチを済ませ、線路沿いに住宅街を進み、井の頭通りを渡るとイスラム教のモスク(礼拝堂)が見えてきます。この「東京ジャーミー」は平成12年に開堂された日本最大級のモスクとの事で無料で見学可能、内部はステンドグラスをはじめ、装飾はエキゾチックな作りで、全く異国の雰囲気。ここでちょっと休憩のコーヒータイトとなりました。



代々木上原駅前まで戻り、いったん解散後残ったメンバーで道幅のある井の頭通りを代々木公園方面に歩き、山手通り(環状6号線)沿いの「代々木八幡宮」に足を伸ばしました。

階段を登り鳥居をくぐり境内に入ると、表通りの喧騒が消え、木々の下の2本目の鳥居の先に本殿が見えてきました。ここは応神天皇(八幡様)を祀る古社で、創建は鎌倉時代との事。境内からは4500年前の遺跡も発見され、復元された竪穴式住居も作られています。少し暗くなりかけた中での参拝を終え「まちあるき」を終了し、近くの代々木八幡駅で解散の運びとなりました。



コロナ禍の中、近場の「まちあるき」は、天候にも恵まれたこともあり色々な場所に初めて訪れる事が出来、予想した以上に満足できる半日となりました。都内の近場でもまだまだ知らない場所があり、これならマスクをしながらではありますが、また次ぎの企画を考えても良いかと思った次第です。

新型コロナ禍の3日間

丹羽讓治

昨年の大晦日に東京では1日に1337名の感染者が出ました。新型コロナ感染拡大の中、我々老夫婦は以下のように活動してます。

10月31日義母の卒寿の祝いで京都に行きました。2017年に義父が亡くなり、お祝いの前の墓参りへと今熊野観音寺に参りました。弘法大師が開いたされる観音寺は西国33ヶ所観音霊場の第15番札所です。大師堂の前のボケ封じ観音に手を合わせました。「近畿十楽漢音霊場の第一番札所でもあります。弘法大師にまつわる湧水「五智の井」を持ち帰り、お茶で飲みました。

11月1日京阪出町柳駅から東へ京都大学の脇を通り、吉田神社を参拝しました。吉田神社の本宮は859年に京都の鬼門にあたる吉田山に建立されました。大元宮は表参道を上り右手ましなだらかな坂を登るとあります。足利義政の正妻日野富子らが寄進して1484年に造営されました。平面が八角形に茅葺屋根が載っている美しい建物です。吉田神道の宇宙観をあらわすのに八角形を用いたのかも知れません。境内には他に東神明社、西神明社と東西諸神社があります。東神明社と西神明社は伊勢神宮と同じ神明造りですが千木と堅魚木の形状が異なります。千木は淵が縦割りが男性神、横割りが女性神を表します。堅魚木の数で奇数は男性神。偶数が女性神とされてます。東神明社が横割り千木で堅魚木が2本で女性神、西神明社が縦割り千木、堅魚木3本で男性神となります。本殿を見ると正面の千木が横割り堅魚木3本、背面の千木が縦割りで堅魚木が2本なので千木と堅魚木の関係が通例と異なりますが混在しているのも堅魚木が2本、3本束になっているのも初めてでした。東西諸神社は全国の神々を祀ってあります。大元宮の境内に入れるのが正月三が日、節分祭と毎月1日に限られてます。参拝後「ふたば」の豆餅を求めて鴨川を渡るも長蛇の列で購入を断念しました。昼食のために商店街に入るも目当ての店にも列をなして商店街奥の古そうな蕎麦屋に入りました。味は期待外れでしたが、店に入るとロボットが接客し、席が空くとモニターに席を表示して、客を誘導するのに感心しました。蕎麦屋で席待ちの時妻がシュークリームを購入し、これが2時間以内に食べるよう言われたので鴨川の河川敷に降りました。河川敷は飛び石で川を渡れるようになって程良い良い空間でした。ベンチが空いたので座って食べ始めて間もなく、クリームが手首に滴り落ちたのでシュークリームを少しあげた瞬間に鶯がシュークリームを持ち去りました。1メートル先のかげらを鳩が啄んでいるとカラスが舞い降りてかささらって行きました。生き物の序列を垣間見た瞬間でした。シュークリームは申し分のない美味しさでした。

11月2日正倉院展行きました。例年は2列3列目で人の間から見てましたが、予約なので人が少なく十分最前列で気兼ねなく鑑賞できました。



吉田神社 大元宮 本殿



吉田神社 大元宮 西新明社
吉田神社 大元宮 東新明社



吉田神社 大元宮 本殿-千木、堅魚木



吉田神社 大元宮 東西諸神社

飲食店でも食事中以外はマスクしてます。若者が飲食店でコロナ前はスマホをいじって無言でしたが、最近でマスクなしで話している光景によく出会います。バスや電車では会話が禁止され静かですが、正常でないように思います。早く日常を取り返したいと思います。

<LFJブックレビュー 67>

『渋沢栄一伝』 鹿島茂 著

2013年8月刊 文春文庫

斉藤全彦

「景観」を考察する際、我々の思考に無意識によぎるものは、対象となる景観そのものがいつ頃出来上がったものであるかという景観を成立させている時代背景である。日本にも大きな歴史の流れがあり、極東にある孤島でありながら矢張り大陸の大きな政治的・経済的・文化的影響を受けてきた。古くは中国からであり、もう一つは近代化というグローバリゼーションの大きな波である。世界を席卷したこの近代化の大波は世界の景観を大きく変貌させてきたことは言うまでもない。

では、極東の孤島である日本にはどのようにこの「近代化」という大波が押し寄せてきたかという、先ず米国ペリー艦長による黒船襲来である。一部の日本の知識人には長崎出島からオランダを通じて近代的なものの見方・考え方などが流入していたが、あくまでもそれはごく一部のものであり、徳川幕府という政治形態はこの近代化の大波に乗り切れるような船ではなかった。

さて、米国への返答として咸臨丸で日本の近代化の船出が始まったのは1860年1月13日であり（帰国は1860年6月23日）、その船には、日本の近代化の知のキーパーソンである福沢諭吉（1835-1901）が便乗していた。下級武士である福沢の知性は緒方洪庵の適塾であらかじめ訓練されていたが、渋沢栄一（1840-1931）は農民出身であり、そのような知性には全く不案内であった。

渋沢栄一の西洋との出会いは偶然的な要素が多い。先ず、徳川幕府体制の限界を認識した渋沢は、幕府を倒すべく徳川慶喜に接近したところ、逆に幕臣に取り入れられ、徳川慶喜の弟である徳川昭武に従ってパリ万博に行ったのが1967年初である。帰国は明治維新の1868年の年末であるからほぼ2年間の西洋体験であったといえる。当初、新政府の官僚として財政改革に大鉈を振るい、数年で在野に下り民間会社の第一国立銀行を設立する。その後の活躍として、前半生は日本という国にとって近代国家の基礎となうような民間会社500社余りの設立に関り、その後の後半生は慈善事業を代表とする多くの社会公共事業団体の設立に参画し、また、米国との民間外交の代表として大きな尽力をなした。渋沢栄一が景観に直接関わるものとして、イギリスのユートピア的都市計画家エベネザー・ハワードが1898年に発表した『明日の田園都市』に基づくまちづくりを、1903年からレッチワースという田園都市をロンドン郊外の農村地帯に作り上げたものの基本コンセプトを活用して、東京の郊外に作り上げてしまった。東急東横線の田園都市駅のまちづくりがそれだ。

渋沢栄一が最も心掛けた事業は近代化の代表的事業の基礎として求められる株式会社という組織形態であった。そういう意味で、近代国家としての豊かさとは何かを彼ほど熟知していたものはいないだろうし、あらゆる分野において公と私の分別を明確化し平等という観念をあらゆる面で実践した、即ち事業家でありながらある意味で思想家であったと言えよう。そういう意味で、彼はパリに行ってサン・シモン主義を知ったのではあるが、「パリでサン・シモン主義のシステムに影響を受けたというよりも、初めからサン・シモン主義者と同じタイプの思考法を持った人間ではなかったか」と認めてもいいかもしれない。（斉藤全彦）



〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町 14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : <https://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan